

ユネスコ無形文化遺産
重要無形民俗文化財

題 目 五

所在地 奈良市上深川町
保護団体 題目立保存会



題目立

(だいまくたて)

上深川町は、奈良市東部の緑豊かな大和高原の一面にあります。

題目立は上深川町の八柱神社の祭りで奉納される芸能で、十月十二日の宵宮祭の日に上深川町の青年達によって演じられます。

題目立の内容

題目立は源平の武将を題材とした演目を、出演者が登場人物ごとに台詞を分担して、独特の抑揚をつけて語る芸能です。

出演するのは上深川の十七才を中心とした青年達です。上深川では十七才になると神社の伝統的な祭祀組織である宮座に加入する慣わしがあり、座入りすることにより、はじめて一人前の地域の成員として認められると考えられてきました。題目立は座入りする年齢に達した青年による氏神への奉納芸能であることから、成人儀礼の性格をもつ行事と考えられます。多くの場合、十七才の者だけでは人数が足りず、それに近い年上の者が一緒に演じます。

上深川には「厳島」「大仏供養」「石橋山」の三曲の詞章が伝わっています。このうち上演されるのは「厳島」か「大仏供養」で、「厳島」は八人、「大仏供養」は九人で演じます。またゾオク（造宮）といって八柱神社の社殿の建て替えや修理が行われると、その年から三年は「厳島」を奉納する慣わしになっています。

宵宮祭の夜、出演者は楽屋にしている神社西隣りの元薬寺を出て、長老の先導で「みちびき」を謡いながら、神社本殿下にある参籠所前に設けられた舞台に向かいます。ソウ（素襖）を着て立烏帽子をかぶり、扇を襟首に挿し、弓を手にするという出立ちで（役により若干相違があります）、舞台の周りの所定の位置につきます。

参籠所にいる呼び出し役が、「一番 清盛」と台詞の順番と役名を呼ぶと、出演者はそれに応じて、独特の抑揚をつけて、まず最初に「我はこれ」とか「そもそもこれは」という言い回しで始まる文句で自らの名を名乗ってから、台詞を語っていきます。



② 厳島「弁才天と清盛」



① 厳島「みちびき」

「巖島」では清盛が弁才天から長刀を授かる場面がありますが、基本的に所作はほとんどなく、出演者は所定の位置で静かに物語りを語り継いでいきます。この語りが題目立の大きな特色です。曲の最後近くになると「フシヨ舞」が舞われます。出演者全員で「よろこび歌」を謡うなか、一人が舞台中央に進み出て反り返るようにして扇をかかげ、強い調子で足を踏みながら舞台を一回りします。短いものですが、それまでの静かな雰囲気から一転した動作で印象的な舞いです。最後に「入句」を唱和し、再び長老の先導で「みちびき」を謡いながら退場します。

歴史

題目立がいつ頃始まったかは定かではありません。興福寺の僧侶の記した『多聞院日記』『夢幻記』天正四年（一五七六）頃の記述に「題目立トテ田舎ノ宮ウツシノ時、昔ノ名仁ノ出立ニテ名乗」とあり、上深川近くの丹生神社（奈良市丹生町）にも十六世紀末から十七世紀初めの年紀のある詞章の一部が残ります。また奈良市田原地区の無足人の日記にも、元禄五年（一六九二）や宝永三年（一七〇六）に山添村の峯寺や的野で題目立が演じられたことが記されています。

上深川には享保十八年（一七三三）に、寛永元年（一六二四）頃の詞章を書写し直した詞章本が残されていて、近世初期にはこの地で題目立が行われていたことがわかります。

題目立の名称は、一六〇三年刊行の『日葡辞書』に「ダイモク」を「ナヲアラハス」と説明していることなどから、出演者が名を名乗り、それから順次、条目を述べ立てるように物語を語っていることからきた名称ではないかと推測されます。

特色

出演者の役は決まっていますが、簡素な舞台装置と簡単な採り物を持つだけで、仮装もせず所作も僅かで、舞台の所定の位置で各々の台詞を語っていくという内容は、芸能史の研究者から「語りものが舞台化した初期の形を伝えている」と評され、中世の芸能の姿をうかがわせるものとして高く評価されています。現在、題目立は上深川にしか伝承されておらず、そういう点でも貴重です。

またこれが観客よりも、あくまで氏神への奉納芸能としての形式を保っており、あわせて青年達の成人儀礼の意味合いをもち、地域の人たちの支えを受けて上演されることも、この芸能の民俗的な特色として重要です。（昭和五十一年重要無形民俗文化財指定）



④ 大仏供養



③ 巖島「フシヨ舞」

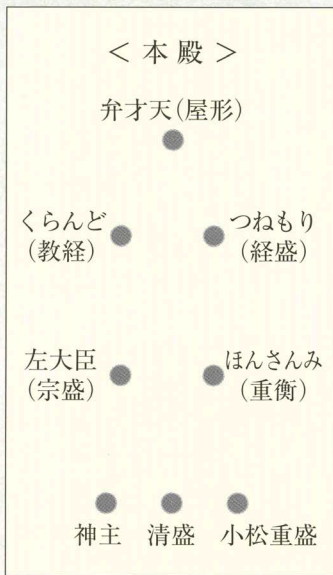
【詞章】

巖島

【大意】

平清盛が名乗り、保元・平治の乱に打ち勝って太政大臣の官を極めたことは、巖島明神のおかげであるので供養をする旨を述べる（一番）。続いて平家一門の者が順々に名乗り、巖島明神を称え（二〜七番）、巖島明神への供養や華麗な巖島明神の様子を賛仰する言葉が続く。（八〜十七番）やがて清盛が巖島明神の宝物の「節刀」（長刀）や「をもかけ」（扇）を拝みたいと願ったところ（十八番）、巖島の弁才天が登場し、天下を治める長刀として清盛に「節刀」を授け（二十一〜二十四番）、清盛はその喜びを謡う（二十五・二十六番）。そのあと「ふしよ舞」があり、入り句を謡って終わる。

【配役と立ち位置】



(みちびき)

あきの国巖嶋の 弁才天は たからえんざや ほか
うがまのそようの

一番 清盛

われはこれ・平家の大將に・安芸の守・清盛とはわがことなり・平家の・古蹟を・たつね候・一門式部卿・葛原の・親王に九代也。刑部卿忠盛・忠盛の子息には・安芸の守清盛・保元平治の合戦に・うちかつて・大政大臣の官を・きわめ・候も・安芸の国・巖嶋の明神の・当家をおん崇め候により・平家はいよく・朝恩に・誇りそふらわんは・急ぎかの巖嶋の明神に・供養をのべばやと・ぞんじ候也

二番 小松重盛

われはこれ・小松の内府重盛と・申者にて候也。それわが朝とまうすは・行基菩薩の・生国也とまうせども。・かたじけなくも天照大神を・都卒の内院より・みさぎたてまつり・御裳濯川の川上に・岩戸はじめ・奉りしとて・このかた萬代の神々の・異国退治の難を・のぞかんとて・海まんく〜とあるがごとくに・みな地をしめしおわします。彼巖嶋と申は・御代の宝をいつくしま・竜宮城と・ひとしくして・蓬萊郷と申ことも・彼明神の御事也。されは巖嶋とは・いつくしいしまと・文字には書けるなり・ひとたびあゆみ運び・一字礼拝のともがらは・二世の願をみつとかや・げにありがた

き霊地也

三番 左大臣(宗盛)

われはこれ・左大臣宗盛と・申者にて候也。然るに当世あがめ奉り・社壇斎垣を作奉り・廻廊を百八十間に玉や・鏡に磨き奉り・海の中に鳥居をたて・此神をあがめ奉り・かたじけなくも当社・沙羯羅竜王の・第三の姫宮胎蔵界の・大日弁才天あらわれたまふ・ろうびにはむつの徳をそなへ・弓を握り鉾をもち天下まもりおはします。かやうにちふおんにほこり候ことも・巖嶋の明神の・おはからひとこそ存じ候也

四番 ほんさんみ(重衡)

そもくこれは・品三位の中將重衡と・申者にて候也。しかるにかの弁才天は・衆生済度の御ために・貧道の者を救わんとて・誓い深き海の底・くがのうろくずに・奇縁結びたまう・しかればふくちにいたるものは・求めざるに玉を拾い・まれいさんに登る者は・そめざるに衣も・かうはしく・たとへ・逆縁の輩なりとも・皆御利生にあつかるべし。まして信心の輩には・などや御利生なかるらん・とふく〜御利生をおんいたし候らへく〜

五番 くらんど(教経)

そもくこれは四十式のくらんどと・申す者にて候也。さて・触れ申一門には・清盛を・はじめ奉り嫡子重盛内大臣 次男宗盛左大將 三男三位の

中将重衡さて其外は・修理の大夫経盛 六条のせんちょうもとたか・左中将清房・かとうわきの兵大將教盛 御子には越前の三位・道盛・能登の守教経・但馬の守経政・新三位の中将祐盛・そのほか源平の衆も・道を飾りて花を折り・当社は花のこたくにましますば・おびただしさは限りなし

六番 つねもり(経盛)

我はこれ七条の・修理大夫経盛と・申者にて候也・このたび巖嶋の・供養あるべきとて・時の奉行をたまりて・法事の・当舞樂の役の・やく伶人舞童幡華蔓・雨はふらねど竜頭・法座高座をかけならべ・舞台には・綾羅錦繡をしき・京奈良の社僧は百二十人なり・法服正しく唐の袈裟・みな水晶の数珠をもち・おびただしさは限りなし

七番 神主

そもくこれは・巖嶋の明神に・つかへたてまつる・神主にて候也・しかるに平家は時を得て・いとく祝はいやましに・当社の供養を述べたもふ・社人の数をそろへつゝ・しんの供物を飾り・奉幣は社壇の前に・八乙女は・鈴をふりたて・神樂の舞の音は・斎垣を響き神のねむりやさますらん

八番 つねもり(経盛)

さるほどに供物の数を尽しては・神馬の数は三千足社頭に積む銭は・十萬貴・綾羅錦繡数しらず

九番 神主

さるほどに・すでに行道も・はてしかば・舞童をそろへて・花をおり・玉の宝冠玉の瓔珞・旗矛を捧げつゝ・舞台の上に・入乱れてぞ舞たまふ

十番 つねもり(経盛)

さるほどに・はしめは祝言そののちは・入口をかへす陵王の・抜頭の舞もすぎしかば日もタやうに傾けば・太平樂を舞うとかや・さだまる舞は百二十番なり・美曲を尽くして・三七日とぞきこへける

十一番 清盛

清盛神をうやまい・申すこと・まず舞童の・御方への・おくり候ものは・綾羅錦繡綾錦・かずを知らすつませける

十二番 くらんど(教経)

さるほどに・平家の一門には・管絃の方へも・もとよりすぐれて上手にて・ましますは・座敷くゝのうちよりも・琵琶 琴 和ごん 笙の笛・美曲をつくして・合せける

十三番 小松重盛

あらをもしろの音楽也・三界に響く松風の・音に例へてしよのこえ・さて又笛は・鳳凰の声をかたどれ・太鼓は波の音とかや・かように作りあはせたる・楽なれば・かゝる拍子の面白さは・松ふ

く風も声をとめ・空飛ぶ鳥も地にちて・羽をたみ・四海の浪もおさまりて・をびただしさはかぎりなし

十四番 神主

さるほどに・舞童の数をつくしては・花を散らす松風も・耳すますや人心・感涙袖をしぼりければ・神も納受ましくゝて・かたじけなくも神殿の水もさゝめきはたりて・さるほどに・十五童子は御手ことに・かずの宝をさゝげて・社壇の内を出でたまふ

十五番 左大臣(宗盛)

あら有難のおん事や・神も納受ましますか・風も吹かねど神殿の・水もさざめき渡り・玉の御奉殿もゆるぎわたり・朱の玉垣・浪かがやくその景色・天竺須弥のせんぼううたと申処に・壹万三千の・諸仏も法座をかさり・色々の音楽を・そふし給ひしも・これにはいかでまさるべき

十六番 ほんさんみ(重衡)

あれく御覧そふらへや・おんまへの海の表てには・五百そふの船をこぎ並べ・うへに歩みの板を渡・そのうへには・座敷くゝを打並御簾を・もよふしてかけたりける・院の御座船と女院の御座船は・なかにもすぐれたり・綾りょうらんをあつめつゝ・船の上をぞ飾りける・綾羅錦繡まんくゝと・風にひらめく旗矛の・紅にそめて夕日に輝き

おもしろさは・なににたとえんかたもなし

十七番 くらんど(教経)

さるほどに・女院の御座船より御楽を奏してあそぼせば・みなく船のうちよりも弦のもの・管のもの・みなく用意ましまして・しんのためとおぼしめし・われもく・とあそばせば・沖もくがももろともに・響きわたりておびたしさは・かぎりなし

十八番 清盛

いかに神主に・申べき事の候ぞや・まことや承候得は・かの巖嶋の明神には・昔より・おん宝もの・おわしますと・承り候なり・まづ節刀と申す・なぎなたあり・またをもちげと申・扇あり・かよふの御宝ものを・一目拝み奉らばやと存し候也

十九番 神主

おふせ承りそふらひぬ・彼巖嶋と申すは・童宮とひとしくしてと・承り候か・彼つるぎは・童宮にましくとも申し・または当社に是有共・承候が・されはじん便不思議のことは・神明仏陀も・神のちかひによりたまふ

二十番 つねもり(経盛)

さらば神主・おんまへにてのつとう・御申しそふらへや

二十一番 神主

さらばのつとう申さんとて・御前にひざまづき・謹請奉幣をさづげつ・つゝしみやまつて申・それあたれる年の年号は・永暦元年庚辰・八月上旬のころ・月のならびは十月あまり・日のおんかすは・三百五十四日にち・清盛并に・一門の雲客おのく信心のいたすとも・吉日の能時を・つっしんでうやまつて申さいはいく

二十二番 弁才天

そもそもこれは・久敷御代に巖嶋の・弁才天にておはします・しかれば清盛わがために・社壇斎垣を磨きたて・百八十間の回廊をつくりたて信心のいたすだにも・うれしいと思ふところに・いまの供養のありがたさよ・まことに清盛が守りの神となるべきなり・これをたまはる清盛とて節刀と云いし長刀を・清盛にさづくるなり

二十三番 清盛

清盛は・おん長刀を賜りて・かたじけなさのあまりに・三度礼拝をまいらせて・いたゞき候也

二十四番 弁才天

いかに清盛うけたまはれ・神あつめておはします・天照太神は我氏子に世をもたせんとのおふせなり・また春日の明神も我氏子に世をもたせんとのおふせなり・また八幡大菩薩も・源氏に世をを持たせんとのおふせなり・かようにもろもろの神々

のおふせなれども・みづから神明に・よきように申して今の世をば・清盛にもたせまもるべきなり・又天下をおさむる剣をばただいまなんぢにさづくるうへは・世のおそれはあるまじきなり

二十五番 小松重盛・つねもり

あらありがたの御事や・かたじけなくも・天女を・あらたにをがみ奉事・一門ともにいるをまし・皆らはいいを参せける

二十六番 清盛・ほんさんみ・くらんど・左大臣

これにすぎたる喜びは・そうらはしとこそそんし候也・いそぎ下向のとうにもなりしかは・浄衣の袖をひるかへし・祝いのうたをうたい都いりとぞきこへける
(よろこび歌)
そーよーやーよろこびーへいへんにー
よろこびに よろこびに またよろこびをかさぬ
れば もんどに やりきに やりこどんど

二十七番 入句

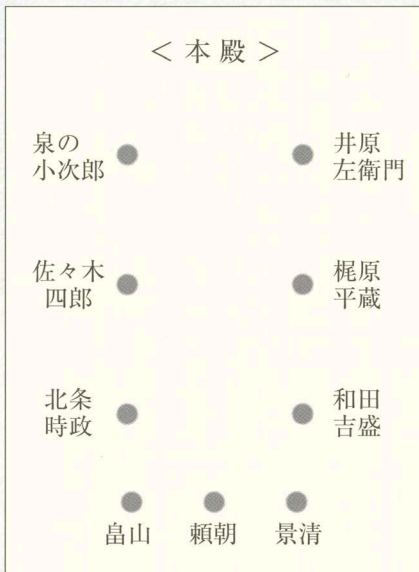
かくて天下もおさまれば・神を敬うともからには・命をは千年の・松のみとりにとへたり・しゅうせつの雨は・時にうるほい五節の風は・枝をならさす・雨国土をうるをせば・ふつき栄華はきわもなし・あはれめてたかりけるは当社
の御代にてとどめたり

大仏供養

【大意】

源頼朝が名乗り、平家の焼き討ちで焼損した大仏再建の供養に上洛する旨を述べる(一番)。上洛の途中、大洪水の富士川で、大蛇と平家の悪霊を退けて、川渡りに成功して京に着く(八番、二十二番)。さらに京から奈良に下向するが(二十三番)、平家の残党の悪七兵衛景清が登場し(二十四番)、頼朝の奈良入りや春日社参詣、帰路の般若寺附近と三度にわたって頼朝をねらうが果たせず、ついに消え失せる。(二十五番、三十七番) そのあと「ふしよ舞」があり、入り句を謡って終わる。

【配役と立ち位置】



(みちびき)

わがちように 弓矢の大将はたれたれぞ よんの
げにもさりさり 頼朝兵衛佐殿に まさる弓とり
なかりけり ようそのう

一番 頼朝

我はこれ・清和天王に十代なり・六孫王に六代
なり・多田の満仲に四代なり・らいぎ伊予の守八
幡太郎義家に・四郎の御子に六条の判官為義の嫡
子に・下野の左馬の守義朝の三男兵衛の佐頼朝と
は我事なり・ここに平家の大将に太政入道浄海の
悪行により・かたじけなくも三国一の大伽羅ん・
南都東大寺・大仏殿の勧進をつかまつり・後白河
の法皇の・勧進により・ともに合力仕り・かの東
大寺を建立し・さるほどに供養をのべんとありし
かは・建久六年六月朔日に頼朝は・上洛仕り大仏
供養あるへきなり・いかに梶原そふろうか・こと
こくもようし候得や

二番 梶原平蔵

そもそもこれは・梶原平蔵景時と・申すものに
て候也・彼東大寺の供養とて・後白河の法皇の・
南都へ下らせ給ふならば・さこそは供行大臣も・
百官万民ことごとく・はなやかなるおんけしきを・
おもいやられて候なり・貴賤くんじゆの・おん警
固のおんけしき・御馬もののか太刀かたなの・見
ぐるしくては・かなうましと・くにをもようし給
へば・御勢いは拾六万八千騎にて候也

三番 はたけやま(畠山)

我はこれ・畠山の莊司次郎重忠と・申者にて候
なり・いかに頼朝に申候はん・かくて拾六万八千
余騎を・ことごとくめしぐせられ候は・国の乱
れとおもふなり・八千余騎は関東の留守にとどめ・
拾万余騎にて御上洛候へや・道の津関々のやうじ
んきひしく候ぞや

四番 和田の吉盛

われはこれ・三浦の大すけ・義明か・嫡子に・
和田左衛門吉盛とは我事なり・このたびのご上洛
の先陣後陣はたれたれそ・おん馬ぞへのつはもの
とも・よき兵者を選びそふらへや

五番 ほうせう(北条)

我はこれ北条の四郎時政と・申者にて候也・か
かる祝の先陣は・いかににはたけ山の吉例成共・梶
原平蔵景時か・いかにのそみ給ふとも・後陣のこ
とはいざしらず・先陣はかなひそふろうまし

六番 泉の小次郎

われはこれ信濃国の住人に・泉の小二郎次郎近平と・
申者にて候なり・おん馬そへにはたれくそ・ま
づよしひらをさきにとして・伊豆の国の住人に・
仁田の四郎高綱・同五郎家光・田代の冠者信高・
横山党に児玉党・なんぶしぶやを前として・惣じ
て三万八千余騎の・つはものは・ものゝぐをぬき
つれて・御所中をうちかこい用心きびしくみへに

ける

七番 とふ音(同)

さるほどに・鎌倉をうつたち・おんのほりあり・おんけしきは・三界にひゝき・をひたゝし・頃はいつなるらん・建久六年さみたれや・下旬のころなるに・鎌倉をおんたちあり・いそぐとすればほともなく・駿河の国にきこへたる・富士のすそにつきにける

八番 ほうせう(北条)

いかにあれくこらんじそうらへや・水上におびただしきかちとるをとの候ぞや・河のみづおびたたく候ぞや・御逗留候て・みつもひきなばわたらせ給ひそふらへや

九番 梶原平藏

当国の住人に・さるへきひとはなきやらん・川案内じやを・くはしく御申そふらへや

十番 井原左衛門

われはこれ・駿河の国の住人に・井原左衛門重安と・申者にて候也・此川と申すは・日本一の大河也・富士のすそより・流れまわる川にて候・その水上は七日路なり・紀の国河内の落合に・ねこまがふちとなづけ候・大蛇のすみかもほど近し・たといとうりゆうましますとも・五日十日に水のおつべきやうもなし・さるほとに・すいれんの上

手を相尋・瀬ふみにいれてこの川の・けしきをみせて・御座船に・つなをつけ・大力にひかせて・御らんしそうらへや

十一番 はたけやま(畠山)

このかわのけしきをみ候に・川上に大雨ふりてはくろう瀬頭をたゝき・東西の岸にちやうとさらへ・水のかさはしたいにまさり・渡らんやうもそふらわす・近江の国の住人に佐々木の四郎高綱は・ミづにちやうれんつかまつり・すいれんには上手なり・さゝきをめされそうらへや

十二番 佐々木四郎

我はこれ・近江の国の住人に・佐々木の四郎高綱と・申者にて候也・それがしは・水海そだちの者なれば・海にちやうれんつかまつりて・川の案内瀬ふみをは・したることはそうらわねども・これは君の御大事にて候へば・身をすてせんなく・瀬ぶみを仕りて・君のおんめかけ候はんとて・はだかになりて川に入・おりひだつておよぎける・よそにてみれば・さながらに・水鳥ほどにぞ・見へにける・うきにしづみ流れける・その身のことばさておきぬ・よそぎみるめぞだいじなる・はるかのおきにおよきつく・ふた時ばかりのとうりうに・またもとのところへおよぎかへり・河のけしきを申しあぐる・かの富士川ともふするは・うへはぬるくして・そこはやし・折れ木・伏木の流るゝ事・いくらというも・かずしれず・岩は大石どう

しうちして・おひたゝしさはかぎりなし

十三番 はたけやま(畠山)

その義にてそふらわは・御座舟共舟もろともに廿四そうの大船を・ひとつにもやうすつなてをハ・しなく泉をめしだいし・ひかせておんめにかかるべし・いかに泉かそうろふか・いそきまいりそうらへや

十四番 泉の小次郎

ふしぎやな・かほとに人の多きなかに・とりわけ泉をめさるゝハ・定て舟をひかせんためにて・おもへばこれは一大事・たとい力はつよくとも・水練にいらさんものは・おもひもよらぬことに候・いまこそ泉が秘蔵の・さいの生角の・きとくをためさんとぞんしそふらいて・お前にこそま

十五番 頼朝

いかに和泉をめす事は・別の子細にてそうらわず拾万騎のその中に・泉を選みたのむなり・御座船共船もろともに・ひきつけたらば・このたひの恩賞には・なつみか原の七千ちようの処を・たのあらそいはあるまじや・はやくふねをひき玉へ・とうくいそぎ候得や

十六番 泉の小次郎

近平は・一ツは君のおふせなり・また思はば・

かほどまで・十万よきのそのなかを・えらみいた
されもふすこと・弓矢とつてのめんほくなれ・お
もひきりつつ近平は・廿四漕の御船を・つなひと
すじにつなきつゝ・おりひたつてぞ引きにける・
いわをじやくまくどしうちして・折れ木伏木の流
るゝこと・いくらとゆふも数しらす・されとも泉
はおそれすして・そこをくゞつてひきにける

十七番 和田の吉盛

あれく御覧候へや・水上よりもおびたたく・
その長八ひろばかりなる・伏木のなかれそうろう
なり・ござ舟をさして・まつひらさまになかれ候
そや・いかかはからひ候へき

十八番 はたけやま(畠山)

見しそふろうにこの伏木は・たゝよのつねなら
す伏木なり・ねこまがふちの大蛇也・そのほか平
家の怨霊なり・さやうにはそんずれとも・なんほ
どこのこのそうろうへきそ・かうひらのたちをぬ
きかねのほとをためさんと・そんし候なり

十九番 泉の小次郎

川のおもてのそふくはなは・御座舟に遅参がで
きて候か・たとひ化生のものなりとも・うへに秩
父のおわします・したに泉があらんほとは・何程
のことあるへきぞと・大蛇にきつてそかかりける・
ねこまがふちの大蛇も・はたけ山かいきをいと・
泉がけしきにおそれて・かきけすやうにぞうせに

けり

二十番 梶原平蔵

いかに大名たち・かほどの大風大雨に・せかい
をあらう浪風に・もよいのつなもたまるまし・い
かにおんはからひ候へや

二十一番 はたけやま(畠山)

何とそうろう梶原殿・重忠かこれに候らはんほ
とは・おん心やすくおほしめせ・十万余騎のひと
くも・秩父がこと葉に力をへ・一度にどつとぞ
時をつくりける・泉か引にしたがつて・むかいの
岸にぞつきにける

二十二番 井原左衛門

これにすきつる・よろこひは候ましとて・夜を
日について御登りあり・遠江の国につきしかは・
はなをみつげのこうをすき・参河に渡すやつはし
の・くもてにものを思へとや・みののゆふのきを
すぎしかは・近江の国に鏡山・瀬田のからはしう
ちわたり・花の都につきにける

二十三番 佐々木四郎

さる程に・花の都につきしかば・みかどの御目
にかけ候はん・法皇の御下向ましますは・近習警
固に・たちたまわり・去程に南都へ下りたまへけ
る・南大門は・和田どの・天(転)轄門ははたけ
山・中之御門は梶原殿・五百余騎にてかためける・

北門国の国人か・一千余騎にてかためたり・其外
もんくつちがため・用心きびしくみへにけり

二十四番 景 清

我はこれ・平家の侍大しやうに・悪七兵衛景清
と・申者にて侯也・このほど道津泊りにて・頼朝
をねらへとも・畠山に見へあひて・うたてこれま
てくたりたれとも・もとよりうちへいらんには・
奈良大衆のまねをして・ねらははやおもひて・
胴腹巻に左右の籠手をあて・五条の袈裟にてほう
かふり・しらの長刀をひき杖につくまに・大
ぜいのなかをおしやふり・身きめかいてぞとうり
ける

二十五番 はたけやま(畠山)

ふしぎやな・奈良大衆のこえきけは・平家のさ
むらいに・悪七兵衛景清が・八嶋の磯のたゝかい
に・ことはたゝかひにつかまつりしこえにたかわ
す・ふしきさよあますなもらすなつわものとも・
おめきさけんてかかりける

二十六番 景 清

景清は・すこしもさわぐけしきなくして・奈良
大衆の・てなみをは・見せんものをとゆふまに・
なきなたをくきながにおつとりのへ・三方へまわ
るかたきをは・いつほうへおつくつし・八方を切
てそまわりける・おもてに・むかうつはものを・
五六拾騎切つておとし・残りの者をおつはらい・

あとにきりをふらして・くらりとこそはうせにける

二十七番 和田の吉盛

いかに方々に申候はん・明日は頼朝の・春日詣るときこへける・そのむねを・もようし候へや

二十八番 景清

景清は・春日詣と聞くよりも・そのぎにてあるならば・春日の神人のまねをして・ねらばやとおもいつゝ・袍衣狩衣立烏帽子・神人にてたち二の鳥居に・いまやいまよとまちかけたり

二十九番 はたけやま(畠山)

もとよりも重忠は・先陣をたまはりて・先陣をかつてゆく処にて・大兵の人数白くせいたかく・ひとにしようかはりたは・春日の神人にてはさらになし・これは平家のさむらいに・悪七兵衛景清と・見しはひが目やらん・そのきたまへ景清との・おんのき候はすは・重忠参り候て・以前の手なみの程をためさんとて・のめきわたつてひかへける

三十番 景清

景清それをききつつ・ことくしや・はたけ山のおふせなりとも・まことに思切るならば・鎧をかへして・畠山の御首をたまわりて・かへさんかたなにて・さしちがへてしなん命は・露ちり程も

思はねど・なほも命をほたいては・鎌倉殿を一かたなど・おもひければ景清は・あざまるの刀をぬきもつて・おつはらい行方しらずになりける

三十一番 ほうせう(北条)

明日はみやこ江入とぞきこへ候そや・いかさまれの景清が・ひまなくねらひ申へき・ゆだんめされてかのふまじ

三十二番 景清

明日南都を・御出有るへきなり・いかにも頼朝に・見へあわぬちよきの・あるへきそ・武者のちよぎに・かしこき人を尋ぬるに・くわんかくるんのくわんとて平家の責をかうむりて・のかれかたき時にこそ・うるしをもつて五体をぬり乞がい人の真似をして・都をさして登りける・道にて合ひける大勢が・中をあけてはとふせたも・見知るものこそなかりける・それより信濃へ下りつつ・木曾の大部覚明と・名乗りけるとも聞いてあり・それかもしもうるしにて我身をぬらはやとおもひ・五体をとろりとぬりたれば・こつかにんのことくなり・文殊堂のあたりに・百人ばかり并居たる・乞がいにんのなかにまじはりて・大道なかにとうと伏し・蓑うらかへして・きるまゝに・こつさいむえんの乞食に・施行をひかせ給へやと・はつとあけてぞくいにける

三十三番 はたけやま(畠山)

はたけ山は・にそうをさとることなれば・ふしぎやなかにんの・ものこいつるそのこえは・よのつねのかい人にはあらず・それ人のかたちは・四諦五経をつかまつり・四諦五経をかさねては・六府をあかし・語韻をもつて重忠は・そうふのていをそんするなり・はしめのかひにんのものこいつるそのこへは・はしめは黄鐘につる声か・双調にさがり・双調につるこえが・平調にまわり・はらの臓が損して・三日の内に死せんずるものゝこえにてあり・後のかい人のものこいつるその声は・はしめはわう色につるこへか・盤渉色にひゝき・盤渉にひゝくこえ・しだいゝにのちつよに・壺越調にひゝくはらへはくるしみあると見へ・したはくるしみなき身ぞや・あますなもらすな兵者とて・ひしめきわたつてかかりける

三十四番 景清

景清是をききつつ・むねんなりこはいかに・一度の奉公なくしては・こゝにてもかしこにても・恥辱をあたへ給ふことこそ・世にも無念にそんしそふらへ・頼朝と死なんも・はたけやまと死なんも・いのちはおなじ命也と・おもひきりそれ景清は情なしはたけ山弓矢取身はさこそあれ・度々に及んで恥辱あたへ給ふ・いつ迄命たほうべきそ・参りさうと申まに・刀をけこたてにとるまに・あさまるの刀をぬきもつて・秩父にきつてそかゝりける

三十五番 泉の小次郎

さるほとに・にそうをたまう・畠山とは申せとも・かうひらのうちものを・ぬきもあわせたまわすして・角筈のおんたたしにて・からりからりとあわせつつ・たれありともみえざりけり

三十六番 井原左衛門

秩父の手勢い五首余騎・このよしを見るよりも・あますならすな景清と・打物のきつさきをそろへて・三方よりも・おつとりこめ・火花をちらして・せめたりけり

三十七番 景清

景清は・三方へまはる・かたきを・一方え・をつくづし・八方へ・きつてぞまわりける・本田次郎は・こがへな・ばんぞう殿は・二の腕を・あかつか殿も・重手なり・般若寺の・西門さつて・はつと引く・そのまま・景清・あとに・きりをふらしてくらりと・こそはうせにける

(よろこび歌)

そーよーやーよろこびー へいへんにー
よろこびに よろこびに またよろこびをかきぬれば もんどもに やりきに やりこどもど

三十八番 入句

さるほとに・かかる吉れいは有明の・南都大仏供養をのべたまう・都へ登り給いける・そのうち

御代もおさまれば・しんのおとろきさらになし・四海の浪もおさまりて・五節の風は枝をならさず・おさまる御代となりたまふ・あはれめでたかりけるは・とうしやの御世にてとどめたり

詞章は、『題目立』(昭和四九年 題目立保存会編集、発行)に掲載された、近世の詞章本をもとにして翻刻された詞章による。近世の本には一句の区切りに点が付されているが、『題目立』ではそれを・で表記している。なおここに掲載するにあたり、『題目立』の翻刻に付された脚注を参考に、表記の一部を漢字や平仮名にあらためた。
なお実際の題目立の上演では、語り口調にあわせて修正がなされることもあり、この詞章のとおり語られるとはかぎらない。



⑤ 題目立詞章本 (上深川町)



上深川町と八柱神社

上深川は、古くは興福寺・春日社の荘園「深川庄」に属する集落であったと考えられ、元和五年（一六二〇）からは津藩の領地となりました。同藩の記録『宗国史』に、戸数三五、人口一六四人とあります。

近代以降は、明治二十二年（一八八九）に山辺郡針ヶ別所村に属し、昭和三十年（一九五五）に都介野村と針ヶ別所村の合併により都祁村となります。そして平成十七年（二〇〇五）に奈良市との合併により奈良市上深川町となりました。茶・蔬菜など農産物の生産が盛んな地域です。

八柱神社は、集落の中央付近の字堂ノ坂に所在します。

祭神は高御産日神・神産日神・玉積日神・足産日神・事代主神・大宮売日神・生産日神・御食津神の八神を祭るとされています。

古くは八王子社と称し、末社に厳島神社・八坂神社があります。

また神社の西隣りには、元薬寺（がんやくじ 古義真言宗）があります。



⑥ 八柱神社

【写真】 桑原英文（表紙・①②③）
【発行】 奈良市教育委員会

二〇一三年三月改訂